琉球大学医学部新任教授記念講演会

副会長　稲田　隆司

琉球大学医学部新任教授記念講演会

日　時：令和 7 年 10 月 23 日（木）19：00 ～
場　所：沖縄県医師会館（3 階ホール）

司会：稲田　隆司 副会長

開　　会

あいさつ　沖縄県医師会会長　田名　毅

講　　演

座長　琉球大学病院長・沖縄県医師会理事
鈴木　幹男 先生

①「これまでの歩みと沖縄に必要なこと
―がんゲノム医療と HPV ワクチン―」
大学院医学研究科　女性・生殖医学講座　教授
関根　正幸 先生

②「人を育て、診断を築き、未来を拓く」
大学院医学研究科　細胞病理学講座　教授
川上　　史 先生

③「脳神経外科診療・研究・教育の三本柱による地域貢献と人材育成」
大学院医学研究科　脳神経外科学講座　教授
浜崎　　禎 先生

閉　　会

去る 10 月 23 日（木）、本会館にて琉球大学医学部新任教授記念講演会を開催したので報告する。

本会と琉球大学の関わりは長く、昭和 59 年より琉球大学医学部の先生方に理事としてご就任頂き、琉球大学と沖縄県医師会のパイプ役として重要な役割を担って頂いている。

本会としても本県の医療界全体の発展のために琉球大学医学部と本会の更なる緊密な連携は不可欠であると認識しており、新たに教授としてご就任された先生方と本会会員との親睦を図るため、講演会並びに懇親会を開催した。

今回は、関根正幸教授（女性･生殖医学講座）、川上史教授（細胞病理学講座）、浜崎禎教授（脳神経外科学講座）のお三方をお招きし、会員との親睦を深めた。

記念講演会では、関根教授より「これまでの歩みと沖縄に必要なこと－がんゲノム医療と HPV ワクチン－」、川上教授より「人を育て、

診断を築き、未来を拓く」、浜崎教授より「脳神経外科診療・研究・教育の三本柱による地域貢献と人材育成」と題し、講座の特徴や研究内容についてご説明頂いた。

その後、会場を移して先生方を囲んでの懇親会が開催され、祝宴が和やかに行われた。

講 演

①「これまでの歩みと沖縄に必要なこと－がんゲノム医療と HPV ワクチン－」

琉球大学大学院医学研究科
女性・生殖医学講座　関根　正幸 先生

私のライフワークである「がんゲノム医療」と「子宮頸がん予防」に関して、これまで分かってきたことと今後の方向性についてお話ししたい。

婦人科がん治療に使用できる薬剤は他臓器がんに比較して多いといえる状況ではなかったが、今や婦人科がんがゲノム医療のトップランナーに躍り出ている感がある。遺伝学的検査がコンパニオン診断として普及し、その結果により薬剤選択が行われ、特に BRCA 遺伝子に病的バリアントを有する遺伝性乳癌卵巣癌の患者が多数見いだされてきている。その際の遺伝カウンセリングでは、関連がん（乳癌卵巣癌の他に前立腺癌、膵癌など）の発症リスクやサーベイランス、予防法についての説明を行うが、根拠になるデータはほとんどが欧米人のデータである。ゲノム医療の現況と、日本人独自のデータから分かってきたことを解説する。

P R O F I L E

略歴

1994 年　新潟大学医学部卒業
2002 年　新潟大学大学院卒業、助手採用
2005 年　米国 Harvard Institute of Medicine 留学
2006 年　新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科・助教
2010 年　長岡赤十字病院産婦人科・副部長
2013 年　新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科・助教
2014 年　新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科・講師
2015 年　新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科・准教授
2023 年 10 月　琉球大学大学院医学研究科 女性生殖医学講座・教授

専門医

産婦人科専門医・指導医
婦人科腫瘍専門医・指導医
がん治療認定医
臨床遺伝専門医
遺伝性腫瘍専門医
産科婦人科内視鏡技術認定医（腹腔鏡）
内視鏡外科学会技術認定医
細胞診専門医
ロボット術者認定資格 : da Vinci Certificate

役職

日本産科婦人科学会代議員
日本婦人科腫瘍学会代議員
日本臨床細胞学会評議員
日本婦人科がん分子標的研究会理事
日本婦人科がん会議世話人
日本絨毛性疾患研究会役員
JOGR Associate Editor
JJGO Associate Editor
ICCJ Associate Editor
Vaccines Guest Editor
EJOG Guest Editor

子宮頸がん予防に関しては、HPV ワクチンの積極的勧奨が中止されていた 9 年間の影響はあまりにも大きく、対象世代では HPV 感染率の急上昇を認めている。9 価ワクチンが公費接種に採用されたものの HPV ワクチン接種率は依然低迷している状況のなか、男性接種の議論も始まったが、費用対効果に疑問があるとして導入は見送られている。検診事業では HPV 単独検診の導入が決まったが、「液状細胞診の統一」と「対象者のデータベース管理」というハードルにより、ほとんどの自治体で準備が進んでいない。「子宮頸がん撲滅」に向けての日本（特に沖縄）の課題について議論したい。

②「人を育て、診断を築き、未来を拓く」

琉球大学大学院医学研究科
細胞病理学講座　川上　史 先生

2024 年 3 月に琉球大学大学院 医学研究科細胞病理学講座に赴任し、琉球大学病院 病理診断科科長を併任しております、川上史です。これまで、京都大学、神戸大学、熊本大学の大学病院を拠点として、婦人科、泌尿器の腫瘍病理学を基軸に、非腫瘍性疾患も含めた幅広い分野で、病理診断、臨床病理学的な研究に携わってきました。病理医を志す若い医師が、まず病院の病理診断科に入局する状況にあって、講座が連携することでキャリアの早い時期からプロフェッショナリズムと探究心を育めるよう環境作りを行っていきたいと思います。

臨床検体を用いた病理診断は 200 年の歴史を有し、ホルマリン固定パラフィン包埋標本の作製技術は 130 年ほど前に理論的な完成をみました。その「古い技術」で作製された標本の形態およびゲノム情報の保持力と保管の簡便さが、次世代シークエンサーをはじめとする「新しい技術」での遺伝子解析を支え、現在の病因に基づいた腫瘍分類の提唱や治療選択の広がりに寄与しています。すなわち今日的な病理診断は形態にとどまらず、その病因や経過、治療反応性を様々なモダリティで評価する統合的なものとなり、日々の診断の姿も着実に変わっています。

琉球大学においても、子宮内膜癌や脳腫瘍の形態・分子病理統合診断の実践の一環として新たな免疫染色の導入や必要な検索の依頼体制の整備、自施設への導入の準備を進めています。単施設での導入の難しい検査の集約化や、

P R O F I L E

学歴
- 1999 年 3 月　愛媛県立松山東高等学校　卒業
- 2005 年 3 月　神戸大学医学部医学科　卒業

職歴
- 2005 年 4 月　焼津市立総合病院・初期臨床研修医
- 2007 年 4 月　京都大学医学部附属病院病理診断科 専門修錬医
- 2009 年 4 月　神戸大学医学部附属病院病理診断科 専攻医
- 2009 年 8 月　神戸大学医学部附属病院病理診断科 特定助教
- 2014 年 11 月　MD Anderson がんセンター　客員研究員
- 2017 年 11 月　熊本大学病院病理診断科　特任助教
- 2024 年 3 月　琉球大学大学院医学研究科 細胞病理学講座　教授 現職、琉球大学病院　病理診断科長　併任

所属学会・役職・その他
- 日本病理学会（評議員、学会欧文誌 Pathology International 刊行委員、病理専門医、分子病理専門医、研修指導医）
- 日本臨床細胞学会（評議員、細胞診専門医、教育研修指導医、渉外・広報委員会幹事）
- 日本婦人科腫瘍学会（子宮頸部病理・コルポスコピー小委員会委員、渉外委員会 IGCS チーム委員）
- 日本婦人科病理学会（学術担当支援委員）
- 死体解剖資格

受賞
- 日本病理学会近畿支部人体病理学学術奨励賞（2010）
- 日本臨床細胞学会最優秀論文賞（2016）
- Pathology International High Citation Award 2023（2023）

人材育成を通して地域に貢献し、地域より学ぶ大学を目指して参ります。一方で分子遺伝学的背景や免疫組織化学的形質の差異による腫瘍の分類は、臨床的な取扱いに影響を与えない疾患をも細分類し、徒に病理診断にかかる労力やコストを増大させている側面も懸念されます。

今後の臨床病理学的研究は、新たな疾患概念やバイオマーカーの確立とともに、リアルワールドデータから、分子遺伝学的腫瘍分類を見直し、臨床的に意義のある疾患分類に整えていく役割を果たしていくものと考えられます。地域に根ざした病理診断の最前線から、臨床的疑問に答える病理学を発信して参ります。赴任後の取り組みと展望をお話ししたいと思います。

③「脳神経外科診療・研究・教育の三本柱による地域貢献と人材育成」

琉球大学院医学研究科
脳神経外科学講座　浜崎　禎 先生

【自己紹介】

沖縄県那覇市の生まれです。地元の高校を卒業後、熊本大学医学部に進学し 1993 年に卒業、熊本大学脳神経外科に入局、以来約 30 年にわたって沖縄県外で仕事をしてまいりました。この度、2024 年 4 月 1 日付けで琉球大学院医学研究科脳神経外科学講座教授を拝命し、故郷である沖縄で後輩を育てる機会を頂きました。

【診療】

キャリアの前半では脳血管障害や頭部外傷などの急性期疾患の手術、その後熊本大学のスタッフとして頭蓋底腫瘍の手術や薬剤抵抗

P R O F I L E

学歴
1993 年 3 月　熊本大学医学部卒業
5 月　医師免許取得
1997 年 4 月～ 2001 年 3 月
熊本大学大学院医学研究科
脳神経外科学講座－博士（医学）取得

職歴
1993 年 5 月～ 1994 年 3 月
熊本大学脳神経外科研修医
1994 年 4 月～ 1995 年 3 月
水俣市立総合医療センター脳神経外科
研修医
1995 年 4 月～ 1996 年 3 月
天草地域医療センター脳神経外科医師
1996 年 4 月～ 1997 年 3 月
熊本市民病院脳神経外科医師
2001 年 4 月～ 2002 年 3 月
出水市立病院脳神経外科医師
2002 年 4 月～ 2005 年 3 月
Molecular Neurobiology Laboratory, The Salk Institute（米国）ポスドク
2005 年 4 月～ 2009 年 4 月
熊本大学脳神経外科医員 / 助教 / 特任講師
2009 年 5 月～ 2011 年 7 月
国立病院機構鹿児島医療センター
脳神経外科医長
2011 年 8 月～ 2018 年 5 月
熊本大学脳神経外科助教
2018 年 6 月～ 2019 年 6 月
熊本大学脳神経外科講師
2019 年 7 月～ 2024 年 3 月
熊本大学脳神経外科准教授
2024 年 4 月～　琉球大学脳神経外科教授
現在に至る

所属学会
日本脳神経外科学会、日本脳神経外科コングレス、日本てんかん学会、日本てんかん外科学会、日本定位機能神経外科学会、日本脳神経減圧術学会、日本脳腫瘍の外科学会、日本頭蓋底外科学会、日本脳卒中学会、日本人工知能学会

専門医
日本脳神経外科学会専門医指導医、日本てんかん学会専門医指導医、日本脳卒中学会専門医指導医、
日本がん治療認定医、機能的定位脳手術技術認定医、迷走神経刺激術資格認定医

役職など
日本脳神経外科学会代議員、日本脳神経外科学会九州支部会理事、日本てんかん外科学会世話人、日本脳神経減圧術学会運営委員、日本てんかん学会九州地方会世話人、九州・山口機能神経外科セミナー世話人、Neurologia medico-chirurgica 査読委員、Frontiers in Cellular Neuroscience 査読委員

性神経疾患に対する機能神経外科手術を経験してきました。「神経機能の温存と回復」をmottoとしています。琉球大学では、2024年度に術中モニタリングが必要な難易度の高い脳腫瘍手術の確立、2025年度に脳血管内治療チームの編成、2026年度には機能外科手術の立ち上げを行い、沖縄県の脳神経外科疾患診療「最後の砦」を目指します。

【研究】

基礎研究では大脳皮質及び基底核の組織形成、臨床研究では主に手術を支援する神経画像をテーマに据えて成果を発表してきました。また最近では、急速に進歩するデジタル技術が医師やコメディカルの働き方を大きく変える近未来を想像しつつ、工学研究者との共同研究にも取り組んでいます。琉球大学では､脳腫瘍、脳血管障害、機能神経外科の3領域を柱として各医局員の研究テーマに取り組み、また、脳神経外科患者管理に利益をもたらす医工連携の異分野融合研究を推進します。

【教育】

医学部学生教育では、系統講義・臨床参加型実習を通して脳神経外科の魅力を伝えます。脳神経外科専攻医・専門医教育を充実させるためには、沖縄県内の脳神経外科施設間の信頼関係が最重要と考えます。脳神経外科学会研修プログラムの再構築を行い、若手に脳神経外科全般の多様な診療経験を提供し、特に女性医師にはワーク・ライフバランスを考慮したキャリアパスの提供を行います。大学院教育においては、これまでの研究成果を踏まえた新しいプロジェクトを立ち上げ、基礎講座との共同研究を開始します。

【まとめ】

日々の診療に最善をつくし、信頼関係に基づいた診療・研究チームを形成し、未来の脳神経外科をリードする人材育成を目標とします。

懇親会